

国府小学校

コミュニティ・スクール実践報告



鈴鹿市立国府小学校

はじめに

平成 18 年 12 月に教育基本法が改正され、その 13 条で、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が規定されました。また、平成 19 年 6 月に改正された学校教育法においては、「学校は、保護者・地域住民等との連携強化を推進するため、教育活動の状況について積極的に情報提供する」ことが規定され、これからの学校のあり方として、「地域とともにある学校づくり」の推進を図ることが期待されています。

学校・家庭・地域の相互が連携協力して「より良い学校づくり」を進めるためのしくみがコミュニティ・スクールです。

これからのコミュニティ・スクールのあり方については、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（平成 27 年 12 月中央教育審議会答申）の中で、「全ての公立学校においてコミュニティ・スクールを目指すべき」と記述されているように、今後、ますます期待が大きくなると考えられます。そういう意味では、鈴鹿市は県内市町のモデル的存在になっているといえるのではないのでしょうか。

そんなことも踏まえて、本報告書では、国府小学校における 5 年間のコミュニティ・スクール推進の取組をお知らせしたいと思います。

平成 28 年 2 月

国府小学校長 杉谷 直俊

目次

1	国府小学校コミュニティ・スクールの歩み	2
2	学校運営協議会と学校支援ボランティア	3
	(1) 学校運営協議会委員のマネジメント力向上	3
	①先進地視察、研修会への参加	4
	②運営協議会委員と児童との懇談	5
	(2) 学校評価による改善	6
	①学校評価自体の改善	6
	②学校評価を受けての具体的な改善事例	6
	(3) 学校支援ボランティアの充実	8
	①ボランティアによる支援内容	8
	②ボランティア会議	10
	③ボランティアの拡充に向けて	10
3	コミュニティ・スクールによる特色ある学校づくりの推進	
	(1) 農業体験学習	11
	(2) 地域発の食育	13
4	成果と課題、及び今後の取組	14

1 国府小学校コミュニティ・スクールの歩み

(1) 鈴鹿市の流れ

鈴鹿市においては、平成 16 年ごろから各学校で、安全安心ボランティアや学校支援ボランティアの導入が始まり、平成 20 年ごろまでに市内全域に広がった。また、平成 20 年度に始まった「学校支援地域本部事業」は、平成 22 年度には、すべての学校で取り組まれるようになった。

平成 23 年 4 月には、市内の公立小中学校 40 校がコミュニティ・スクールに指定され、全市を挙げて「地域とともにある学校づくり」に取り組む体制が整った。

(2) 国府小学校のコミュニティ・スクール

国府小学校においても平成 23 年度から学校運営協議会が設置され、学校運営に対して地域住民や保護者の代表が一定の権限と責任を持って意見を言える仕組みはできた。しかし、学校運営協議会の会議は、それまでの「学校評議員制度」のころのものと特に変わることはなく、それぞれの委員が個別に意見を言うことはあっても、その内容が合議され、学校運営に具体的に反映されることはなかった。導入当初は、学校も学校運営協議会も「コミュニティ・スクールってなんだろう？」の状態だったのである。

そんな中、平成 24 年度からは、鈴鹿市教育委員会が学校運営協議会の委員長や各委員を対象とした質の高い研修会をたびたび開催してくださった。国府小学校からもその研修会に毎回、複数で参加していった。その結果、研修会に参加した委員の意識は少しずつ高まり、その後の会議の中でもそれぞれが当事者意識を持って学校への意見を出してくださるようになった。

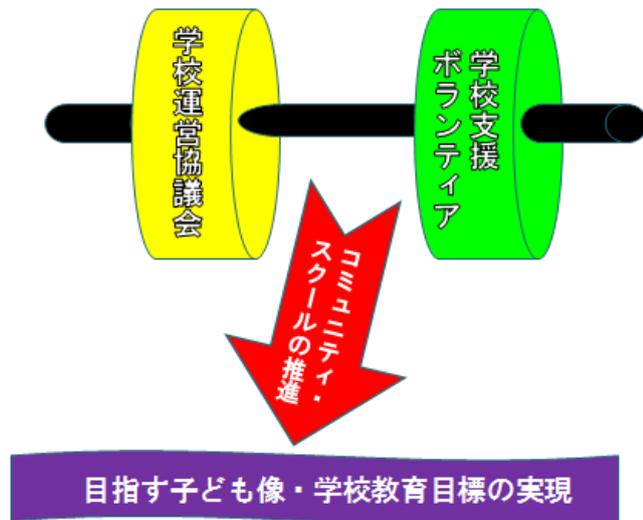
また、平成 24 年度から 27 年度にかけて、春日市、三鷹市、京都市、津市のコミュニティ・スクール先進校へ、委員が複数で視察研修を行った。コミュニティ・スクールの現場を視察校の校長や運営協議会委員長から直に聞いて、学校や子どもの様子を見せていただいたことにより、国府小学校の進むべき姿を運営協議会の各委員が具体的にイメージできるようになった。

平成 27 年度には、「学校関係者評価」の改善に向けた方策や、子どもの学力向上を目指した、学校と学校運営協議会や学習支援ボランティアの協働作業の提案もしていただいた。各委員に「学校を良くしていく主役は、自分たちである。」という意識が醸成され、国府小学校のコミュニティ・スクールは「支援型」「連携型」を経て、いよいよ「協働型」の一步を踏み出したといえるのではないかと考えている。



2 学校運営協議会と学校支援ボランティア

鈴鹿市では、「学びのネットワーク」「安全安心のネットワーク」を土台として、学校支援地域本部をへてコミュニティ・スクールへと発展してきました。コミュニティ・スクールの中心組織である学校運営協議会に加え、学校支援ボランティアが、コミュニティ・スクールの推進するための車の両輪であると考えています。この2つがうまく機能するようにマネジメントしていくことが重要であると考え取組を進めてきました。



学校運営協議会委員の資質向上をはかり、委員の当事者意識を高め、学校運営協議会の熟議を学校経営に生かしていくために、本校では運営協議会委員の先進地視察と研修会への参加を積極的に取り組んできました。

さらに、学校支援ボランティアの充実拡大に向けて、地域コーディネーターや民生委員児童委員の力を借りて、保護者や地域の方に働きかけてきました。

(1) 学校運営協議会委員のマネジメント力向上

コミュニティ・スクール導入当初は、保護者や地域の方だけでなく学校運営協議会委員自身もコミュニティ・スクールの理念や学校運営協議会の役割、運営協議会委員は何をするのか等、分からない事も多かった。運営協議会委員の資質向上、当事者意識の醸成を図るために、文部科学省や教育委員会が開催する研修会にできるだけ多くの委員に参加していただきました。



【南が丘小視察】

① 運営協議会委員の先進地視察と研修会への積極的参加

	視察先	視察者
平成25年度	三鷹市立北野小学校 地域とともにある学校づくり推進フォーラム東京	委員2名、校長、 CS担当教員
平成26年度	京都市立嵯峨小学校	委員3名、校長
平成27年度	津市立南が丘小学校	委員3名、校長
	三鷹市立南浦小学校 地域とともにある学校づくり推進フォーラム東京	委員3名、教頭

視察で学んだことは学校経営に活かされています。例えば、土曜日の教育活動についてです。鈴鹿市では土曜日の教育活動は、学校や地域の実情に応じて、学校運営協議会で協議し計画していくことになっています。視察に行った京都市立嵯峨小学校では、土曜日に漢字能力検定を行っていました。漢字能力検定は、検定合格のためにコツコツと学習を積んでいくことが大切で、学力向上、学習習慣の確立に効果が大きいと教わりました。そこで、本校でも平成27年度から、土曜学習（教育課程外）として、学校運営協議会が主体となって漢字能力検定を年間3回行うことにしました。



嵯峨小学校を参考にして、次のように実施しました。



試験監督をする運営協議会委員

平成27年度土曜授業日程

教育課程内（全員登校）

- 5月16日（土） 授業&危険箇所点検（PTAと合同）
- 6月20日（土） 観劇
- 10月17日（土） 授業参観
- 11月29日（日） 公民館文化祭 ※5年生のみ
- 1月16日（土） 授業

土曜活動 教育課程外（希望者登校）

- 6月13日（土） 漢字能力検定
- 10月31日（土） 漢字能力検定
- 1月30日（土） 漢字能力検定

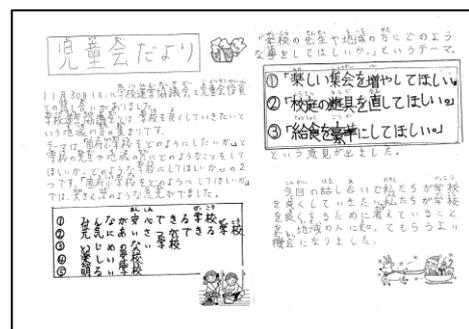
	月日	研修会	参加者
平成25年度	9月12日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員2名と校長
	2月6日	コミュニティ・スクール実践交流会	委員4名と校長
	3月6日	三重県学校支援等コーディネーター研修会	委員4名
平成26年度	11月7日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員4名と校長
	11月26日	地域とともにある学校づくり推進フォーラム（岐阜会場）	委員3名と教頭
	12月20日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員長
	1月20日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員3名と教頭
平成27年度	8月4日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員2名と校長
	8月27日	地域とともにある学校づくり推進フォーラム（愛知会場）	委員3名と校長
	11月28日	コミュニティ・スクール推進研修会	委員長と校長
	12月9日	コミュニティ・スクール推進研修会	地域コーディネーター2名
	2月6日	コミュニティ・スクール推進フォーラム	委員5名と校長 教頭, 教職員3名

② 運営協議会委員と児童との懇談会の実施

昨年度の学校関係者評価で、「運営協議会に子どもたちの意見をどのように取り入れるかが課題」との意見をいただきました。そこで学校運営協議会委員と児童会役員との懇談会を開催しました。

テーマを「国府小学校をどのようにしたいか。」と「学校の先生や地域の方にどのような事をしてほしいか。どのような学校にしてほしいか。」の2つとして、子どもたちの声を直接聞きました。子どもたちなりの様々な思い、子どもらしい意見を伝えてくれました。

今回の懇談会は、子どもたちに運営協議会の事を知ってもらう良い機会にもなりました。児童集会や児童会便りで、協議の内容を全校児童へ報告しました。

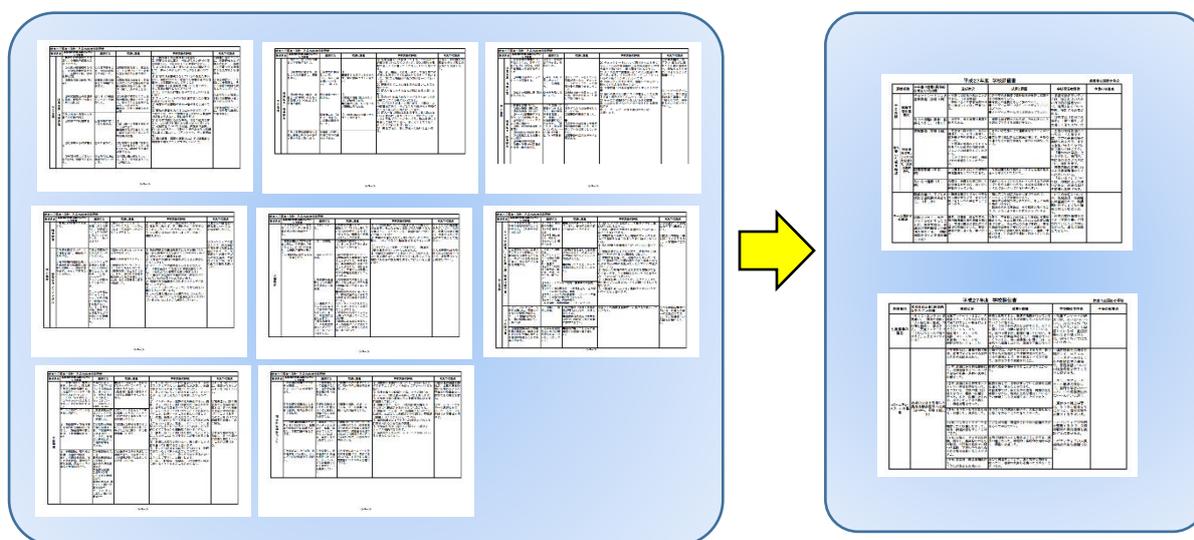


(2) 学校評価による改善

① 学校評価自体の改善

昨年度までの学校評価は、評価項目が多岐にわたり詳細に自己評価がなされてはいたが、委員さんにとっては評価しにくく、効果的に学校改善に結びついていない面がありました。そこで、運営協議会の中に評価検討委員会を作り、学校評価を学校改善に向けてより実効性の高いツールとなるように、評価項目の見直しを図りました。

評価項目を見直し学校経営方針の5つの柱に精選した結果、関係者評価を行う時に活発に熟議が行われ、今後の学校改善に結びつく建設的な意見が出ました。



② 学校評価を受けての具体的な改善事例

【入学式への来賓招待】

「卒業式は自治会長や民生委員が来賓として参加しお祝いするが、入学式は来賓がない。小学校入学は子どもや保護者にとって、大きな節目でおめでたいことだ。地域全体でお祝いしたらどうか。」と運営協議会で意見をいただきました。



⇒ 平成25年度入学式から来賓を招待し、華やかな中にも引き締まった式になりました。

【コーディネーターの複数化】

平成25年度の学校関係者評価で「コーディネーターさんには様々な役割をやってもらっていて頭の下がる思いです。お一人での負担を減らすためにも複数の体制にして役割分担はできないでしょうか」との意見をいただきました。



ボランティア会議で司会をする
2人のコーディネーター

⇒ 平成26年度からもう一人コーディネーターをお願いし、2人で仕事をしてもらっています。

【ノーゲームデーの実施】

全国学力学習状況調査結果を受けての熟議の中で、家庭での学力向上に向けた取り組みとして、「ゲームやパソコンなどを使用しない時間を作り、親子で何かに取り組むようにしたらどうか」という意見が出ました。

⇒ 生活習慣チェック週間中の1日にノーゲームデーを設定し、ゲーム時間を少しでも減らし、読書やお手伝いの時間に充てるきっかけ作りとしました。

国府小学校ノーゲームデー

ゲームをやらず遊んでいませんか？

6年生の全国学力調査時のアンケート結果によると、年間以上の人が、1日1時間以上ゲームをしています。2時間以上する人が、24.5%(60人中21人)をいいます。これは全国平均より、4.2%高い値です。

国府小学校では、「1日のゲーム時間は30分以内にとりまよう」という目標が、児童生活のプログラムづくりに関係する人はそれ以上しています。

ゲームのやりすぎは、皆さんの成長に障害を及ぼします。

少しでもゲーム時間を減らすきっかけとして、「ノーゲームデー」を待ちました。この日は、ゲームをしないで、友だちと外で遊んだり、読書したりしましょう。

ゲーム時間	割合
1時間以上	24.5%
30分以内	75.5%

国府小ノーゲームデー
1月15日(木)

【ホームページの充実】

平成25年度の学校関係者評価で「より広く発信できるホームページの更新・充実にも力を入れてほしい」との評価を受けました。

⇒ 26年度から校務分掌のホームページ係が学校で一人だったのを学年に一人ずつ位置づけました。また、更新内容によってはメールでUPしたことを知らせるようにしました。

その結果、26・27年度の学校関係者評価では、「昨年より更新回数が増え、メールなどでも連絡があるのでとても良かった。」「コミュニティ・スクール推進に関わって、国府小学校のホームページの更新状況がたいへんいいと思う」と評価していただきました。

(3) 学校支援ボランティアの充実

① ボランティアによる支援内容

(ア) 算数科への学習支援ボランティア

本校では、全ての学級で算数の授業に週2回ずつ学習支援ボランティアが入っています。各クラスに入るボランティアは年間を通じて固定しています。このことにより、ボランティアさんは、子どもたち一人ひとりの学習状況をより詳しく把握できることになり、児童もボランティアさんと親しくなり、相互の信頼関係が増しています。



学習支援ボランティア時間割表

担当学年・クラス

学年・組	担任	学習支援ボランティア	活動可能日・時間
1-A	加太	松井美代子	水・2 木・2
1-B	小菅	平井 洋子	火・1 水・2
2-A	高濱	森 直美	月・2 金・2
2-B	青木	宮崎 直子	月・2 水・1
3-A	山本	村井 恵美	火・1 木・2
3-B	田辺	椎名 祥江	火・1 水・4
4-A	玉田	大北ひとみ	火・2 木・3
4-B	谷本	仲 恵美	月・1 火・3
5-A	樋口	木村 敬一	月・1 木・1
		芝池 秀代	火・2
5-B	窪田	伊藤 研一	水・3
		奥川 勝男	火・1 水・2
6-A	南部	齊田 昭	火・2 金・2
6-B	岸原	一柳 伸治	火・3 水・2
6-C	日置	伊東 武夫	火・2 水・3
なかよし	稲垣 水谷 黒田	岸 俊子	火・1・2 木・1・2
		平子 昌子	金・3
		松井美代子	水・1

(イ) その他の学習支援

算数科以外への支援は、その都度地域コーディネーターさんを通じて依頼しています。支援内容は、家庭科の調理や裁縫実習の補助、生活科の町探検の付添い、マラソン試走の見守り等様々です。職員室に貼ってあるボランティア要請表に必要事項を書いておくと、地域コーディネーターさんがボランティアさんに連絡し、都合がつかう方を手配してくれます。



学習支援ボランティア要請表

月	日	曜日	学年	組	依頼内容	人数
4	23	木	3	A	社会 町探検 町探検 町探検 (町探検)	4人
5	15	金	2	B	生活 町探検 町探検 (町探検)	4人
5	21	木	2	A	生活 町探検 消防署へ行きま。《2~3限》	2~4人
5	26	火	2	B	生活 町探検 コスモス新町公園へ行きま。《5~6限》	(72人) 2名
6	4	火	2	B	生活 町探検 夢の川へ行きま。《3~4限》	(72人) 2名
5	21	木	3	A	社会 町探検 <2~3限>	72人2名
5	26	火	3	B	町探検 <3~4限>	〃
5	28	木	3	B	町探検 <2~3限>	〃

学習支援ボランティア要請表

月	日	曜日	学年	組	依頼内容	人数
6	25	木	1	2	A 家庭 ミッションをこなす	3名

(ウ) 読み聞かせ

読み聞かせボランティアサークル「たんぽぽ」の皆さんに毎週火曜日に読み聞かせを行ってもらっています。



(エ) 登下校の見守り

安全安心パトロール隊として、地域の方が71名、保護者が93名登録し、交差点に立っての見守りや、登校班と一緒に歩いてくださったりしています。また、PTA副会長さんには、講習を受けた後青パト登録してもらい、随時パトロールをしてもらっています。



(オ) 芝生守り隊

本校の運動場は平成22年度に全面芝生化されました。その後、芝生守り隊が結成され、芝生の維持管理のための活動をしていただいています。毎年、6月下旬に種まきをして、養生にはいります。日中の高温時に水遣りをするのはできないので、早朝5時から夕方6時から1時間以上にわたって水遣りをしていただいています。おかげで、9月には校庭が見事な芝生に覆われ、運動会では子どもたちが裸足で元気に走る姿が見られます。



(カ) おやじの会

平成26年に、学校運営協議会委員の一人の方が発起人となっておやじの会を設立してくれました。校庭の樹木の剪定や縄跳び台の修理など、重労働をいただいています。



② ボランティア会議

本校では、年間4回、学習支援ボランティアさんに集まっていただき、活動の反省と次の学期に向けての改善策を話し合っています。本年度からその内の2回に全教員が参加し一緒に話し合うことにしました。普段は時間がなく、教員とボランティアさんがじっくり話し合うことができないので、このボランティア会議は有意義な会になっています。



③ ボランティアの拡充に向けて

どの学校でも、ボランティアの増員が課題になっています。学校便りや、PTA総会、授業参観日などあらゆる機会を使って、募集していますがなかなか新規登録がありません。一番効果的なのは直接勧誘です。本校では、地域コーディネーターさんが積極的に保護者や地域の方に声をかけていただくおかげで、少しずつですが、着実に支援の輪が広がっています。

支援内容	人数
算数	17
その他学習支援	14
読み聞かせ	18
パトロール	164
芝生守り隊	6
おやじの会	8

地域とともにアグリにチャレンジ

～「農業体験学習」と「地域発の食育」～

国府地区は、自然が豊かで、古来より人が住み、農業が盛んな地域です。また、鈴鹿型コミュニティ・スクールの取組とも相まって、地域には子どもたちとともに汗を流し、野菜づくりを教えてくださいと語るゲストティーチャーや学習支援ボランティアの方が多数みえます。

そこで、子どもたちに、野菜づくり、収穫、調理、食べる等の一連の活動を体験させ、農業のすばらしさ、自然や生命の尊さを気づかせたいと考えました。

そして、この取組を継続することで、子どもたちが将来、地域の農業を担い、国府地区を支える地域人となるのが期待できます。

これまでの取り組みを整理し、全校で計画的に継続して取り組めるようにカリキュラムを作成しました。

平成27年度 特色ある学校づくり
「アグリにチャレンジ」カリキュラム

	一学期	二学期	三学期
1年	さつまいも栽培	さつまいも栽培	
2年	さつまいも栽培	さつまいも栽培 大根栽培	大根栽培
3年	さつまいも栽培 大豆栽培	さつまいも栽培 大豆栽培	豆腐作り きな粉作り じゃがいも栽培
4年	じゃがいも栽培 カルピスナックスクール		
5年	田植え すいか・かぼちゃ受粉体験 さつまいも畑除草	稲刈り・餅つき そうめんぬた作り	もち米 農芸祭 販売
6年		お弁当の日 ねぎ・ごま栽培	鶏飯作り

(1) 農業体験学習

① 畑作

低中学年では、ジャガイモやサツマイモ、大根を育てました。子ども達は種をまき、水をやり成長の様子を観察しました。収穫した作物は学校で調理実習をしたり、家庭へ持ち帰り家族で味わったりしました。畑を耕し、畝を作り、肥料を撒くといった作業をはじめ、種や苗の植え方、収穫の仕方などの指導も地域のボランティアさんにお世話になりました。



② 稲作

地域の方から、「畑作だけでなく、稲作も体験させてあげたらどうか。指導者や水田は手配できるので」というお話があり、27年度から5年生が米作り体験学習を行うことになりました。

5月に田植えを行い、9月に稲刈りを行いました。

収穫したもち米を使って、土曜授業の日に餅つきを行いました。この時にも青少年育成町民会議の方に、指導していただきました。また、地域の農芸祭の会場でもち米の販売もしました。大変好評であったという間に完売し、児童もとても喜んでいました。



③ スイカの授粉体験

6月に5年生が学校近くの畑で、スイカの授粉作業を体験してもらいました。雄花と雌花を見分けて、雄花の花粉を雌花に受粉させていきました。1ヶ月あまりで大きく成長したスイカを見て子ども達は感動していました。また、そのスイカをお腹いっぱい食べさせていただきとても喜んでいました。



**スイカの授粉
児童「難しい」**

鈴鹿で作業体験
鈴鹿市国府町の市立国府
小学校5年生66人が10日、



スイカの授粉作業をする児童たち

学校近くの畑でスイカの授粉作業を体験した。同校では、地元で伝わる郷土料理作りなど地域性を生かした体験学習に取り組んでおり、この日は徒歩で15分ほどの大杉吉包・市議会議員(67)の畑を借りての学習。児童らは「つるから雄花をちぎり取り、雌花を雌花に付けて」などと説明を受けた後、畑に入って作業に汗を流した。スイカは7月に収穫し、5年生の給食で提供される。大杉議長によると、周辺はスイカの産地だったが、今は後継者不足という。坂母代菜さん(10)は「雌花が見つからない。受粉させるのが難しい」と話していた。

(2) 地域発の食育

① 郷土食 「平野のそうめんぬた」と「八野のとり飯」づくり

そうめんぬたは、平野町に伝わる郷土料理です。100年ほど前、地元製麺所があり、折れるなどして出荷できないそうめんの活用を考えたのが始まりとされており、今では冠婚葬祭に欠かせない郷土食になっています。

5年生が、平野町の主婦の方に講師をお願いしてそうめんぬたの歴史、作り方を教わり、実際に調理して試食しました。



八野町では、昔から人が集まると飼育しているニワトリから肉を取り、とり飯を炊いていたそうです。最近では、自治会の新年の集まりの後、各組で炊いたり、法事の時の食事や各家庭の日常食としてとり飯を炊くそうです。

1月の土曜授業の時に八野町の主婦の方を講師に招き、6年生がとり飯作りを行いました。鳥肉はひね鳥と若鳥の肉を混ぜる等、昔からの伝統の調理法で作りました。

地域の方に郷土料理を教えてもらうことは、郷土の歴史や文化を知り、受け継いでいくきっかけとなります。



② 子どもが作るお弁当の日

子どもたちに「食」に関する知識・理解と自発的な実践力を身に付けさせたいとの思いで、27年度から6年生で、「子どもが作るお弁当の日」の取組を始めました。

この取組は小中連携の一つとして、平田野中学校区の全ての学校で行いました。



4 成果と課題及び今後の取組

(1) 成果

① 学校関係者評価

例年、学校運営協議会の委員の方々に学校関係者評価をお願いしていた。これについては、教職員側にも委員側にも「莫大な事務量のわりに、効果が見えにくい。」という反省点があり、改善が求められていた。

今年度は、学校運営協議会の中で、次のような改善案を議論していただき、昨年度までのものと比較してずいぶんシンプルなものとなった。その結果、何をどう改善するのかが明確になった。

- 学校の職員にしか分からないような事務は、評価項目としない。
- 評価項目を絞って評価する。
- 評価項目については、4月に校長が示した「学校運営の基本方針」に沿ったものにする。

② 特色ある学校づくりの推進

国府地区は、古くから農業の盛んな地域であり、農業に触れることによってわかる喜びや厳しさを子どもたちに伝えていきたいと考えている地域の方は多い。学校運営協議会でも農業体験学習やこの地域ならではの食育は国府小学校の特色として取り組む価値があると認めていただいている。

米や野菜を作ったり、収穫しボランティアの方々と一緒に料理を食べたりする経験は、きっと、子どもたちの郷土への愛着を育むことに繋がるであろう。

(2) 課題

① 学力向上

コミュニティ・スクールの取組は、それ自体が目的になってしまっていない。学校の第一の使命は、子どもたちに確かな学力を身につけさせることにある。本校は、たくさんの学習支援ボランティアの方に授業の支援をしていただいているにも拘わらずその効果を示すことができないでいる。学力向上は、本校の最重点課題である。

② 教職員の意識改革

平成 27 年度に実施された鈴鹿市教育委員会のアンケート調査の結果を見ると、「教職員の認知度」が課題となっている。一般の教職員の関心が、日々の「分かりやすい授業づくり」に傾くのは当然のことと言える。が、これからの時代に求められる学校像や地域連携について理解することも重要である。これについては、校長等の指導力が問われる点であろう。

(3) 今後の取り組みの重点

次年度以降、次の 2 点に重点を置いて取組を推進したい。

- 学校支援ボランティアのさらなる充実と学力向上
- 地域づくり協議会との連携